



落ちる 拾う 消える

園長 小島 澄人

幼い時に学んだこと、一生忘れられません。幼稚園時代、父親と一緒に海岸に押し寄せてくるごみを拾い集めていたのを思い出します。自分たちの海は自分できれいになりたい、そう思っていたのか父親は幼い私を連れだしてごみを拾っていました。小学校でも同じでした。

中学生から島を出て、都会の中学校に進学すると、中高一貫校でしたが、私はすぐに「話の広場」という会の立ち上げに参加し、学校や地域のごみ拾いを始めました。そこでは、生意気にもみんなで「どう生きていくか、どんな生きかたを」、語り合っていました。1000人余りの人に、門で挨拶をしてきました。大学、高校の教師、そして幼稚園の先生になっても、忘れないこと、「自分ひとりぐらいと思ってごみを捨てる。地上に一億あまりのごみが落ちる。自分だけでもと思ってごみを拾う。地上から一億あまりのごみが消える。」の言葉です。

70年ぐらい前にはごみ拾いをする人はいませんでしたが、今ではあちこちで、またイベントでごみ拾いが行われるようになりました。落ちる、拾う、消える、このパターンも少なくなってきました。ごみを落とす方も減ってきましたが、まだまだです。幼稚園で「地球の大掃除」として、皆さんにご案内してきました。あちこちのごみも少なくなりはしましたが、このイベント、まだまだ続けます。

最近、卒園式では、「自分ひとりぐらいと、自分だけでも」を取り上げて子どもたちには話しています。自分一人ぐらい、そう思うと気が緩みます。つつい愚痴を言ったり、人の悪口を言ったりします。自分だけでも、そう思って気を引き締めます。頑張る気持ちかわいてきます。

72になりますが、幼い時のことが思い出されます。ごみを拾う、これだけはこれからも続けていきたいです。